東京日々新聞

八百六拾五號

千葉村農儀太郎

日向国高千穂山ハ神代の古蹟なり。此山中の高千穂村ハ素より頑固土地にて。人の心も直からず米さへ乏しく常ハ食ふ。物ハ粟稗のみなるよし。其村内の農民ハ儀太郎と呼者ありしが。妻ハ過し日世を去て独り詫しく暮しる。又此近傍へ折々来て古交商ハ女あり。儀太郎兼て知已あるゆ。明治七年四月の上旬或日晩景彼の女。風来て泊りを依頼しかば。心能兼知て。其夜女を殺害し。所持の金銭品物を奪取ども四隣さへ遠く離れし一軒家。誰知る人も嶽なり。

實ニおそろしき人心

無懸といつも愚なり。夫より半月余もすぎて。此村内の飼犬が女の斬首咥て来るを。人々驚き。其所此所と珍索あせしに儀太郎が屍の後ニ見則ざる女の死骸を発見る。

蕙齋竹房畫

人形師 具定

彫春